

石神遺跡第 14 次調査 現地説明会資料

独立行政法人奈良文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部

<http://www.nabunken.go.jp/>

調査地 奈良県高市郡明日香村大字飛鳥字東六反田

調査面積 約 480 m²

調査期間 2001 年 7 月 2 日より、継続中

調査途中の資料につき、引用・転載はご遠慮ください

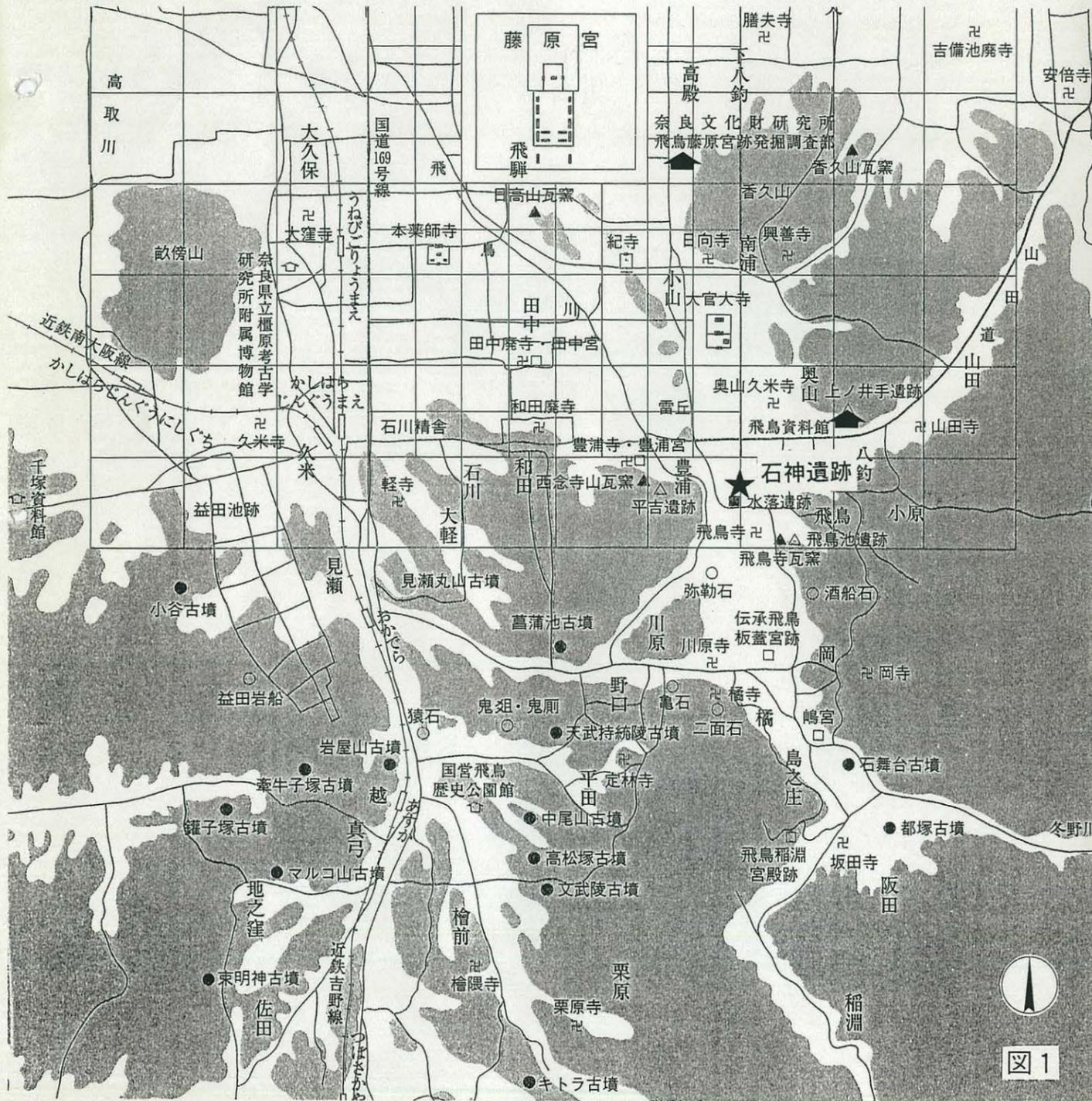


図 1

はじめに

奈良文化財研究所では 1981 年から石神遺跡の発掘調査を行っており、今回が 14 回目です。これまでの調査で 7 世紀から 8 世紀を中心に各時期の遺構を検出しています。なかでも 7 世紀中頃の遺構は非常に大規模で、斉明朝の饗宴施設であったと考えられています。また、この遺跡からは明治時代に石人像と須弥山石が掘り出されたことでも著名です。

今回の調査地点は昨年度の調査（第 13 次）で西半分を発掘した田の東半分にあたり、これまでで最も北に位置しています（図 2）。第 13 次調査では、斉明朝ころの遺跡の北辺を区画する施設と考えられる大規模な東西方向の溝と塀などを検出しました。いっぽう今回の調査区の南側は 1990 年に調査し（第 9 次）、基幹排水路とみなされる南北方向の溝などを検出しました。これは第 4 次調査（1984 年）で見つかった大型の井戸からはじまり、西区画と東区画の間を通過して北流する溝です。

このような成果をふまえて、今回の調査では東西方向と南北方向の溝がどのような状況で接続しているのか、また昨年みつかった溝と塀を北限とみなして良いのかといった点を解明することを目指しました。

検出した遺構の概要

遺構は大きく A～C の 3 時期に分けられ、A 期はさらに細分されます（図 3・4）。

なお文中の遺構の深さなどは現存部分を計測したものです。

- A 期** 7 世紀前半～中頃。最盛期の A 3 期が斉明朝（655～661 年）のころとみなされます。
- A 1 期** 東西溝 1（幅 2.5m、深さ 0.7m）は大規模な石組溝で、南北溝 2（幅 1.5m、深さ 0.4m）が T 字形に接続します。第 13 次調査区には建物 4（桁行 5 間、梁行 3 間）があります。
- A 2 期** 調査区西側の南北溝 2 を南北溝 3（幅 0.7m、深さ 0.4m）に付け替え、これと接続する東西溝 4（幅約 1m、深さ 0.3m）も造ります。調査区中央には東西溝 1 とセットになる東西方向の塀 1（2.1m 等間）を建てます。この塀は調査区より東へ延びています。
- A 3 期** < A 3-1 期 > 北側の東西溝 1 を埋めて、その上に底石を敷いた東西溝 2（幅 0.9～0.5m、深さ 0.3m）を造ります。東西溝 2 は東側で幅が半分になっています。調査区東側にこれと接続する南北溝 1（幅 1.5m、深さ 0.2m）があります。塀 1 は南北溝 1 より東を撤去し、建物 2（桁行 4 間、梁行 3 間）を建てます。南北溝 3・東西溝 4 はそのままです。
- < A 3-2 期 > 南北溝 1 を直線から屈曲した流れに付け替えます。底石をもつ東西溝 3（幅 0.4m、深さ 0.2m）は南北溝 1 に接続し、その合流点以北には南北溝 1 にも 20 cm 大の底石を敷いています。建物 2 は取り壊し、北側を塀 1 にそろえた L 字形の塀 3・4 と総柱の建物 1（桁行 1.8m、梁行 2.4m）を建てます。調査区南西隅には建物 7 が建ちます。東西溝 2、南北溝 3、東西溝 4、塀 1 はそのままです。
- < A 3-3 期 > 南北溝 1 と東西溝 3 は廃絶し、南北溝 1 と東西溝 2 の合流部分をふさいでいるのが確認できます。東西溝 2 と南北溝 3 はそのままですが、東西溝 4 は北へ移して東西溝 5 になります。東西方向の塀も同様に塀 2（2.1m 等間）に建て替えます。昨年度調査区には建物 6 があります。



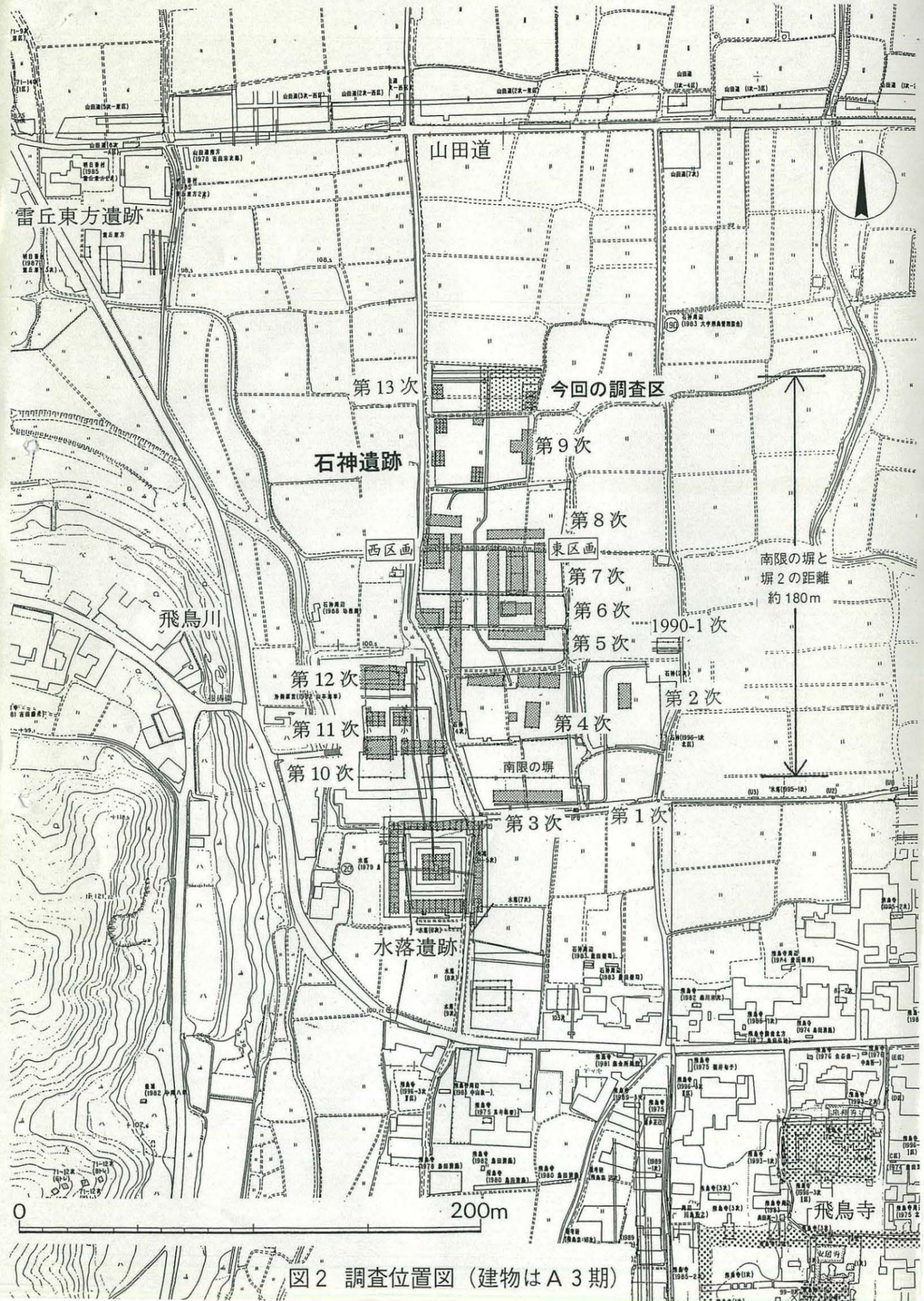


図2 調査位置図 (建物はA3期)

B期 7世紀後半。天武朝 (672~686年) ころと考えられます。

東西溝も南北溝も埋めて、調査地一帯は整地土に覆われます。建物も希薄で、広場的な様相だったのでしょ。調査区中央では石敷が一部だけ遺存していました。堀5はC期の溝で覆われているため確認できませんが、北へ続いていると思われます。昨年の調査区には大型の建物5 (桁行8間以上、梁行2間) があります。

C期 7世紀末。藤原宮期 (694~710年) ころと考えられます。

調査区東側に素掘の南北溝4 (幅 0.9m、深さ 0.2m) があります。おなじく西側にも南北溝5があり、初めは幅 2.5mの素掘溝で、後に石の護岸を持つ幅 0.8mの溝に造り替えます。調査区中央付近は2本の溝に挟まれた道路的な空間だったようです。

その他 調査区中央に多量の石が入ったおおきな土坑、その南に小規模な2間×2間の建物3があります。これらは詳細な時期が不明ですが、C期より後のものとみられます。

出土した遺物

C期の南北溝5から大量の土器が出土しており、漆壺、墨書土器、針書き土器などが含まれています。瓦はほとんど出土していません。また埴塼などもわずかに出土しています。

まとめ

今回の調査では以下の点が成果としてあげられます。

A期における石神遺跡の北限と、その周辺の状況が明らかになりました。A2~A3-3期は東西・南北の溝と堀がよく似た構成で造り替えられています。このように基本的な配置を踏襲する点が特徴的です。そして規模が大きい東西溝1・2が同じ位置で造り替えられることから、ここが北の端として強く意識されていたことがうかがえ、東西溝1・2と堀1・2がA期の北限を区画する施設だと考えられます。なお南限の堀から堀1までは約175m、堀2までは約180mです。

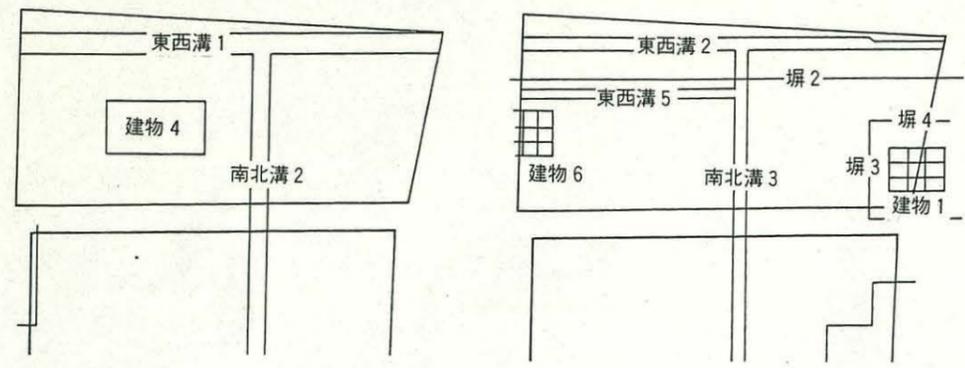
またA3期には南北の基幹排水路 (南北溝3) をはさんで、長大な建物で四角く囲んだ東区画と西区画が存在したことがわかっています。この東西両区画の北側に、倉庫と考えられる総柱の建物が並び建つ構成であることがわかってきました。

このように建物配置とともに、北限の東西溝はそのまま周辺の溝や堀、建物をなんども改修するという、A3期の全体的な様相がみえてきました。

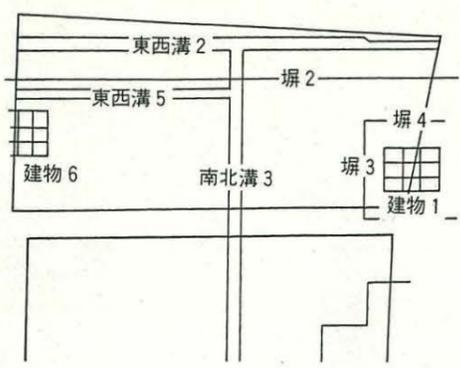
このほか、これまで資料の少なかったA1・2期についての具体的な変遷が明らかになりました。石神遺跡最大の溝である東西溝1は第13次調査でA1~3期に存在するとみられましたが、A3期には溝2に造り替えていることがわかりました。A1期の南北溝2も大規模なもので、従来考えられてきたよりA1・2期は整った様相のようです。

B・C期では東西方向の区画施設は存在せず、このころの石神遺跡は調査区より北へ広がっていることもわかりました。

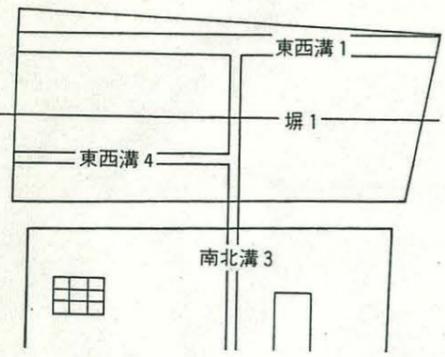
以上のように、今回の調査によってA期での北限がほぼ確定したことは、石神遺跡の全体の構成を考える上で重要な資料を提供することとなりました。今後はさらに北へ調査をひろげ、山田道との関係やB・C期の広がりなどを明らかにしていきたいと考えています。



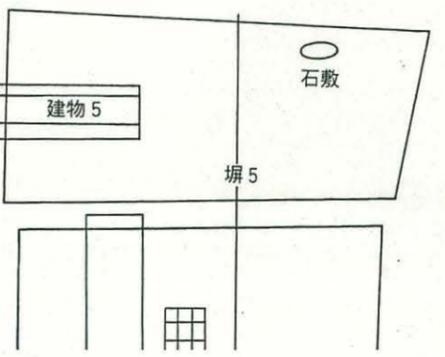
A 1 期



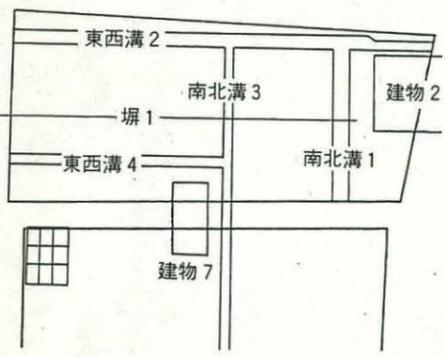
A 3-3 期



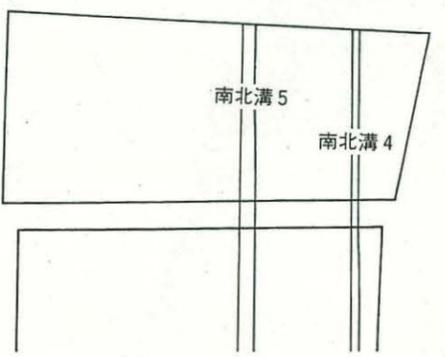
A 2 期



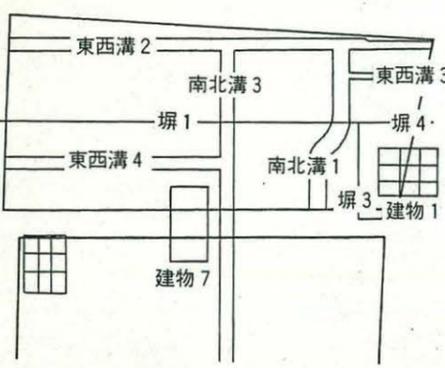
B 期



A 3-1 期

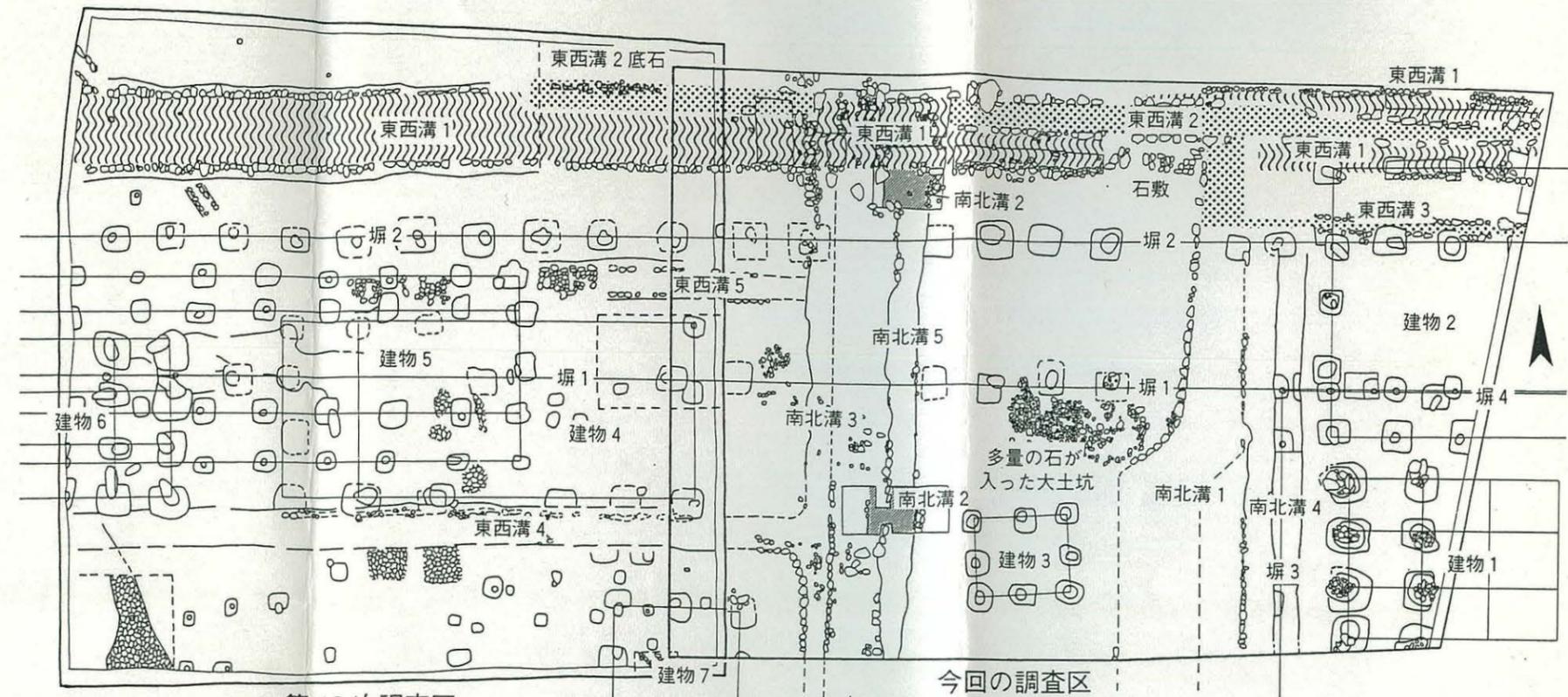


C 期



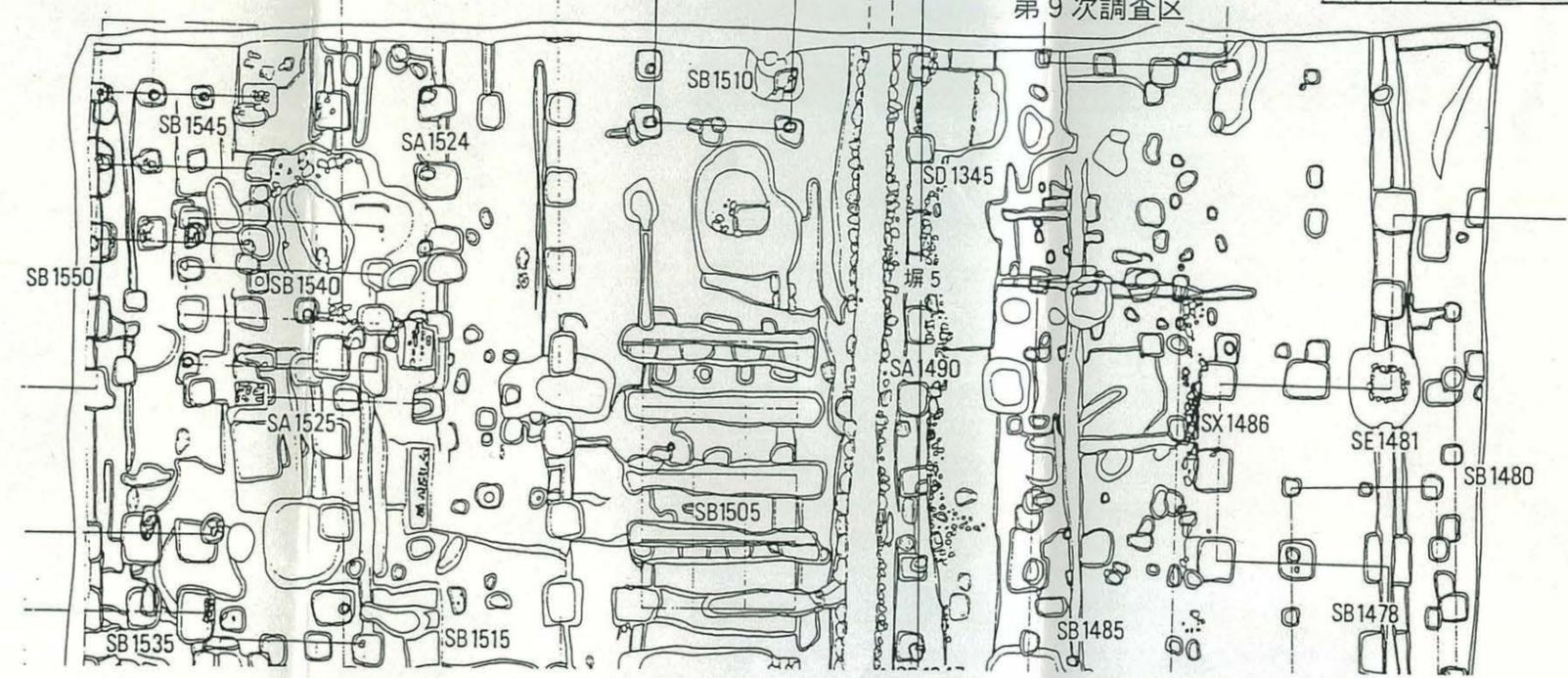
A 3-2 期

図 3 遺構変遷図



第 13 次調査区

今回の調査区



第 9 次調査区

図 4 遺構略図 (1:200)

石神遺跡から掘り出された石人像・須弥山石は飛鳥資料館にて展示中です。

